

私のプロジェクトと夢

日高健一郎 人間総合科学研究科世界文化遺産学専攻長
(ひだか けんいちろう／西洋建築史、世界遺産論)

1. すべての「夢」はローマに通じる

夢を抱く人にとって、その夢を取り巻く状況もまた夢の一部であろう。こうしてみたい、こうなってみたいという夢は、必ずそれを可能とする状況や条件、手段や能力を前提にする。実現不可能であるからこそ、夢は夢でありえるのだが、われわれは心のどこかでその実現を望んでいる。不可能であると同時に、「叶えたい」という欲求が夢には付きまとうのである。

私にとって、夢を育む原風景は大学院時代に留学したローマである。古代ローマ、中世、ルネッサンス、そしてバロックと、長い時間に沿って形成された膨大な芸術遺産が重なるこの都市の魅力は、今さら詳しく述べるまでもない。しかも、それは視覚に感じることだけではないのだ。教皇庁図書館では、駆け出しの研究者の卵である私の目の前に、500年前の分厚い羊皮紙本が置かれる。研究所では、イタリア内外の著名な研究者が、背をかがめて一心に本を読んでいる。師事したアルナルド・ブルスキ教

授が市内に構える研究室では、和やかな団欒の中で研究を巡る話が弾む。朝、その日の仕事と生活とともに始まる雑踏の騒音、夕映えに一瞬の静けさを取り戻してシルエットに沈む市街、そこにある音と光のすべて。ローマに住む私を囲むすべては、研究の出発点であると同時に、理想の到達点でもあった。1975年からの2年弱の滞在の後、その後の数多くの滞在を含めて現在に到るまで、「あれを」「これを」という私の夢のすべてはローマでの経験に根ざしているように思う。

と、ここまでは、「若き日の留学時代に思いを馳せて、なお往時の夢を追う老境の研究者」という、ややありふれた構図なのだが、ローマの魔力は、後年、美しい回想で私を慰めるような穏やかなものではなかった。それは、その後のさまざまな局面で私を励ますと同時に駆り立て、私を本質的に変えたようにも思われる。ローマは、歴史を刻むその石畳の上に佇む人を大きく変える街なのかもしれない。

2. 時空の広がりの中で

ロンドンとパリは古代ローマ時代にそれぞれロンディニウム、ルテティアと呼ばれた。ヨーロッパの大都市で古代ローマに起源を持つ都市は多く、帝国の版図は、紀元後2世紀に、西はイベリア半島から東はシリア、また南はナイル河中下流域から北はライン河口とブリテン島にまで及んだ。都市ローマはその広い版図の焦点であり、衣食住すべてに関わる多くの物資の流入点であった。その中には、琥珀、毛皮、香料、樹脂、真珠など、帝国の外から運ばれた貴重品も多く、後に交易品のひとつに因んで名づけられたシルク・ロードはもっとも長大な陸の交易路であった。都市ローマは、この広大な空間へ、そして繁栄を極めた過去の時間へと人を誘うのである。

私は、自分の頭脳の狭さも忘れて、いつしかこの壮大な古代ローマ世界、特にその遺産を現在に伝えるローマ建築に強く惹かれるようになった。もちろん、どのように広い領土であろうと、それには限界がある。古代ローマ帝国も西に大西洋、南にアフリカ大陸という地理的限界をもっていた。帝国北縁もまた、ドナウ、ラインの両大河の流れにほぼ一致する。一方、帝国の東に対峙した「異国」はササン朝ペルシャであった。この東端で、西欧世界の源流であるローマは、さらに広大なアジア世界に出

会っていたのである。都市ローマに立つ人は、地中海を囲むこの広がりを意識せざるを得ない。ローマ留学で私を変えた力は、この時空の無辺の広がりであったように思う。しかもそのローマ世界は決して永遠ではなく、その崩壊とともに中世世界が始まる。私は、地中海を囲むように広がるローマ建築のすべて、その古代から中世への壮大な変化を目にしたい、そのすべてに触れたいと望むようになった。

3. イタリアからトルコへ：ハギア・ソフィア大聖堂への挑戦

留学を終えた私は、ルネッサンス時代の建築書の研究で学位を取得し、幸いにもある大学に職を得ることができた。当時、同じ部屋で助手として机を並べて勤務していた畏友が小場瀬令二さん（現在本学教授、社会工学類長）である。

さて、この大学で建築構造学の加藤史郎教授に出会ったことから、私は地味な史料研究から一転して、中部イタリアのルネッサンス都市フィレンツェに、家並みを圧して聳えるサンタ・マリア・デルフィオーレ大聖堂のドームの研究をすることになった。イタリア・ルネッサンスの始まりを告げるこのドームは、基部直径42メートルに達する大構造で、仮枠の設置が難しかったため、施工途中でも自立しうる構造上のさまざまな

な工夫がなされたのであった。当時の史料の解説と現代の構造解析を組み合わせた私たち独自の共同作業は、500年前の建築家の工夫と驚くべきその有効性をつつまた一つと明らかにしていったのである。私たちが世界で最初に始めた、この建築史と構造学の共同研究というスタイルは、その後建築史研究の一翼を担う重要な研究方法となっていた。

当時まだ若く、研究への野心が旺盛であった私は、傲慢にも、早くからサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂の大架構を一つの通過点と考えていた。その先に、もう一つの偉大な建築、建築史研究者の憧れの構造への挑戦を「夢」として抱いていたからである。6世紀に創建されたコンスタンティノポリス（現イスタンブール）のハギア・ソフィア大聖堂が、その夢に見る研究対象であった。ドーム構造の安定には、基部に生じる外向き放射状の推力の処理が重要であり、この部分は直下の支持構造とともに頑丈に作る必要がある。ハギア・ソフィアの中央ドームは、フィレンツェに比べてやや小さいものの、この通則に反して、ドーム基部に40もの窓を備えていた（うち、四つは後の改修補強で閉鎖）。しかし、その窓は、地上40数メートルの高みから、天の光を堂内に導く採光装置でもあった。同時代の史料で「地上から建て上げたのではな

く、あたかも金の鎖で天空から吊り下げられたような」と驚嘆されたこのドームは、奇跡の構造として、否、奇跡の芸術的成果として、フィレンツェのドームを廻ること1000年、現代からは1500年もの激動の歴史を生き抜いてきたのである。

1990年から始まった総合建築調査は、結局、現在まで18年も続くことになるのだが、その原動力は、やはり「ローマの夢」に秘められた力であったように思う。ハギア・ソフィア大聖堂の聖なる空間は、紀元後330年以降ローマ帝国の首都となったコンスタンティノポリスの往時を偲ばせる数少ない建築の一つなのである。調査の準備と開始までには多くの苦労話があるが、それは別の機会に譲ることにしたい。1990年の初夏、中央ドームの上に立って眺めるボスポラスの海は碧く、風を受けて海峡の彼方に望むアジアの陸地は、「ローマから遠く離れたローマ」を強く意識させた。

ハギア・ソフィア大聖堂は、東ローマ帝国繁栄期に建設されたので、謂わば、古代ローマの建築技術、建築文化の粋を結集した精華であった。この意味で、「ローマ建築のすべて」に触れることを望んだ私の「夢」は実現したのかもしれない。確かに、この建築には、ローマ建築のすべてが凝集されているといいだろう。しかし、たとえハギア・ソフィアのドームを研究者と

して「征服」したとしても、それは、やはり「ローマ建築のすべて」を実際に目でみたことにはならないし、また手で触れたことにはならない。夢は決して実現しないのである。実現しないからこそ、人は夢を追うのであろう。しかも、ドームやその支持構造を精査する中で、私はもう一つの課題を見出すことになった。1500年の時間を耐えた構造は、各所で「老化」の兆候を見せ、世界遺産「イスタンブールの歴史地区」(1985年登録)を構成するこの重要建築物の痛々しい現状は、劣化原因の分析と適正な修復、維持管理の必要性を訴えていたのである。

4. 北アフリカへ

時間が前後するが、先のイタリア留学を終えて帰国した私は、10年を経て特定国派遣研究者制度(日本学術振興会)に選拔されて、再びローマで生活することになり、その間、イタリア考古学研究所の非常勤研究員としてアテネに渡り、イタリア考古学会の重鎮、アントニーノ・ディ・ヴィータ教授の指導を受けた。アクロポリスの下、その名も「パルテノン通り」にあってひと夏を過ごした住宅には、いろいろな思い出が伴う。イタリア語に慣れていた子供たちは、ギリシャ語の洗礼を受けることになった。どこに行ってもその土地の生活と文化を楽しんでくれた妻と子供たちには感謝の

気持ちが尽きない。私は、研究主題をローマ時代末期からその後のビザンティン時代へと広げ、イタリアから乗っていった古い中古車で、ギリシャ各地の教会堂を巡っていた。「ローマの夢」はギリシャにいる私をなお、各地へ駆り立てたのである。

ディ・ヴィータ教授からは、彼がリビアで進めていたレプティス・マグナ遺跡の調査に加わらないかとのお誘いを受けたが、当時の私にとって、北アフリカのローマ世界はさすがに遠く、この時はリビア遠征の機会を逸してしまった。「そうか、今回は残念だね。でも、君はいつかリビアに来るはずだ。待っているよ。」こう言って、私の肩を軽くたたいた教授の笑顔は、その後の私の研究を予言していたのかもしれない。

前述したハギア・ソフィア研究の構想が具体化するのには、このギリシャ滞在の後のことである。組積造ドームの調査に関連して、トルコ東部、シリア、ヨルダンの各地のローマ遺跡、ビザンティン建築を訪れる機会を得て、私は、夢の実現への遠い道のりをゆっくりと進んでいった。しかし、その道程で大きく欠けていた領域は、彼方の大地、北アフリカであった。

トルコでの調査と研究が一段落し、大部な報告書が完成してみると、その欠落は徐々に私の中で重さを増し、「ローマ世界の踏破」という夢の中の「未踏峰」として、

私の挑戦を待っているかのように思えるようになった。今から思うと、傲慢な意欲である。アテネの研究所で、「北アフリカに行くことなくして、君はローマ世界を語ることはできない」と、優しい笑顔の中に鋭く深い眼差しで私の視野の狭さを指摘したディ・ヴィータ教授の言葉は、克服すべき課題として色濃く残ったのである。教育の本質の一つは、この時の教授の言葉のように、「あの時のあの言葉が忘れられない」という強く短い一言と一瞬の眼差しにあるのかもしれない。

2006年春、本学の塩尻和子教授（後に北アフリカ研究センター長）とご主人塩尻宏駐リビア大使（当時）のお世話で、私は「未踏峰」リビアのローマ遺跡を目にすることができた。砂の褐色と国旗の緑を除き、その土地は色のない国であった。しかし、ローマ時代の海港都市は、建築を飾る大理石やモザイク、行き交う人々の衣装、店に並ぶ各地の食料や産品で、都市は色彩と活気に溢れていたことであろう。

世界遺産に指定された大規模遺跡、それから外れて沿岸に散在する初期教会堂の遺構、すべては、強い陽光と潮風を受けて、今なお波の音を聞きながら長い眠りについているかのようであった。感激は確かに大きかった。しかし、同時に、目にしたのは、保存修復の国際水準から取り残された建築遺

産の惨めな状況であった。リビア考古学庁のジュマ・アナグ長官は、ディ・ヴィータ教授の教え子であり、私とは兄弟弟子になることもあって、リビアとの縁は今後しばらく続きそうである。しかも、私が「見た」遺産をいかに次世代に「残す」か、という課題が、ここ北アフリカでもはっきりと現れることになった。

5. 世界遺産のための大学院教育

1992年、日本はユネスコの「世界遺産条約（世界の文化遺産および自然遺産の保護に関する条約）」を批准した。私の方では、ハギア・ソフィアが順調に進み始めた頃である。ブルガリア国境に近いエディルネの街で、オスマントルコ最大の建築家シナンの傑作セリミエ・モスクの実測を行ったのもこの頃であった。礼拝の合間を縫って、大急ぎで対標の位置測定を行ない、次の礼拝開始前に慌てて撤収という作業の繰り返しであった。

苦労話は尽きないのだが、今から思うと体力に任せてあれもこれもと楽しい調査であった。しかし、調べていく建築の数が増えていくとともに、私は、それらの劣化や不十分な維持管理を見逃すことができなくなった。特に、残念に思えたのは、有名、無名を問わず、きわめて乱暴になされた修復である。それは、まさに物言えぬ遺産に対

する暴力であった。技術、資金、そして何よりも過去から貴重な遺産を受け継いでいるという意識の欠落が、そうした粗雑な工事を許し、ようやく残ってきた建築の往時の表情を回復不能なまでに傷つけていた。すでに世界遺産に登録されて久しいハギア・ソフィア大聖堂もその例外ではなかった。

世界遺産条約批准の翌年、日本には文化遺産二つ（法隆寺と姫路城）、自然遺産二つ（屋久島と白神山地）、計四つの世界遺産が誕生した。この前後の新聞・雑誌記事を比較すると、「世界遺産」の四文字が爆発的に登場回数を増やすのがわかる。得てして、研究者はこうしたブームを冷ややかに見下す傾向があるのだが、私は、こうした社会的関心をより永続的な文化遺産修復の分野に引き寄せられないものだろうかと考えていた。しかし、これもまた、生来の楽観主義によるもので、世論や政策を踏まえた緻密な作戦があったわけではなく、「何とかならないものか」という素朴な問題意識を超える行動には未だ結びついてはいなかった。この時、文化庁で世界遺産の実務を進めていた気鋭の人物たちを、後に本学の大学院「世界遺産専攻」に同僚として迎えるなどとは、もちろん夢にも想像していなかったのである。

6. 夢を離れて

「ケンイチロウ、今朝、リチャードが亡くなったよ。」1994年11月1日、気持ちのいい秋の朝日を楽しみながら、いつものように（当時、私は、日本学術振興会の特定国派遣研究者としてローマに滞在していた）、ローマのアメリカン・アカデミーを訪れた私には、図書室の司書から聞く突然の悲報であった。ビザンティン建築史の泰斗、リチャード・クラウトハイマーその人が97歳の生涯を閉じたのである。直接言葉を交わした機会は多くはなかったが、私の意識の中での彼の存在は、ローマ世界、特に古代から初期中世への過渡期の地中海世界を包み込む偉大な目標であり、理想の研究者であった。

ドイツ系のヘルツィアーナ・図書館の最上階に居室を設けていた彼は、晩年、体調のいい時にはいつも下階の中庭や談話室で若手の研究者と談笑した。老齢のせいでもあろうか、その窪んだ鋭い目は、ローマ世界とそれに続くビザンティン世界を隈なく目にしてきた「孤高の旅人」の厳しい道程を暗示するのだが、冗談や笑いには、童顔を思わせる無邪気さが感じられた。彼の周りに集う若手の研究者は、彼の境地との隔たりを感じつつも、それに一步でも近づくことを目標としたのである。

今から思うと、この大きな喪失感、し

かし、私の中に別の可能性を作り出したようである。97歳という生涯、矍鑠（かくしゃく）とした老研究者の姿を見て、私は、逆に「夢」からしばらく離れてみようかと考えた。呆れるばかりの楽天主義であるが、尊敬する偉大な人物が刻んだ97年、まだその半分も生きてない40歳半ばで、多少の寄り道もいいのではないか、という意識は、調査で感じた痛々しい建築遺産の現状と一つに結びついた。

しかし、それだけではない。クラウドハイマーはどこにでもいた。ローマの初期キリスト時代の教会堂はすべて彼が詳細に調査し、有名な「ローマキリスト教会堂大全」に収録されていた。ハギア・ソフィア大聖堂の修復を行った19世紀半ばの建築家について、スイスの片田舎の文書館で記録調べをしていた私が、史料の中に見つけたのは、彼独特の角ばった字体だった。彼、クラウドハイマーがやはりこの文書館で行った文献調査への協力に対する自筆の礼状である。罫線のない白紙に書かれた几帳面な文字は、下に向かってだんだん傾きを増していた。ペンを持った彼の手の温かみがそこには残っていた。現代の情報機器は、この手から手への形のない情報伝達を決してなし得ないであろう。

リビア東部の半ば砂に埋もれた教会堂遺跡の調査も、まず、出発点は彼の記述であ

る。研究一般にとって、これは別に珍しいことではないかもしれない。先駆者を越えなければならないのだ。しかし、「彼」は、私の「夢」をすでに叶えてしまっていたのである。彼がなしえなかった「わき道」へ逸れることで、抱き続けた「夢」とは違う何かを残したいという気持ちが強まったとしても、それは自然であった。

10年か、20年か。いや、10年では実現できないだろう。20年はあまりにも長すぎる。いくら考え込んでも、将来を自分の計算だけで決めることはできないのだが、「15年」という時間が、その時の当面の結論であった。15年間を、世界遺産の保護を担う人材を育てるために働いてみようかという決心である。

本学に世界遺産専攻が誕生するのは、その後10年を経た2004年4月のことである。あたかも計ったかのように、碩学クラウドハイマー没後10年で専攻開設が実現したが、それは予想した困難、予想しえなかった困難に翻弄され、責任に押し潰されるかのきわめて苦しい10年間であった。ようやくと一条の光が見え、それが大きく広がったのは、先代の北原学長、徳永事務局長、石井学群長、そして文化庁の大木課長（当時）のご支援をいただいた2年間で、それまでの8年間、私の構想に対して周囲は冷ややかそのものであった。

専攻の開設に漕ぎつけた時、しばしば「夢が叫びましたね」と声をかけられることがあったが、「夢」からの「わき道」、否、人材育成という大学人の「義務」で成果を得た私は、この挨拶にやや戸惑いを感じないわけにはいかなかった。「夢」とほとんど一つになって結びついてはいるものの、それは「仕事」であり、しかもそのほんの一部であった。

7. 夢とプロジェクトの始まり

クラウトハイマー博士の死から15年という年は来年にあたる。ここ数年、私は「仕事」一筋を余儀なくされた。「仕事」に向いてないためか、懸命に働いた割には得るものは少なく、精神の消耗だけが続いた。勝手な期待であるが、そろそろ再び「夢」に戻る時期が来てほしいものである。しかし、それは二者択一の問題ではない。抱き続けている「夢」と、自らが中心となって作り上げてきた組織をより緊密に融合させることができれば、この気楽にして幾分か運に恵まれた研究者の生涯に、それなりの大団円が作り出せるかもしれない。

「彼」の最晩年と比べると、私にはなお30年の時間が残されている。そうだ。何も、焦ることはないのだ。アルバニア、マケドニア、レバノン、シリア、トルコそしてリビア、チュニジア、アルジェリア。それぞれに残

された建築遺産と調査が待っている。「プロフェッサー・ヒダカ」ではなく、「ケンイチロウ」と若い日の声そのままで肩を抱いてくれる各地の友人たちもお健在だ。

私が、ごくまれにこうした「夢」を語ると、必ず帰ってくる質問は、「本当にできるのですか？」という疑いである。組織運営に疲弊した同輩が、この疑念を返す時、その目は研究の情熱を失って淀んでいる。地中海全域のローマ・ビザンティン遺跡調査という壮大な構想は、確かに一人の研究者の手に負えないだろう。「彼」ほどの長生きはできないであろう私、「彼」ほどの才能にはまったく恵まれていない私には、なおさらである。しかし、もし、今、私の話に目を輝かせてくれる世界遺産専攻の学生の中で、私の「夢」に加わってくれる人が出てくれば、状況は少しずつ変わるかもしれない。大学人として行った「仕事」が、研究者としての「夢」の実現を助けてくれるかもしれないのだ。優秀な学生と格段に進歩した測量器材の助けを借りるならば、「彼」がかつて費やした膨大な調査期間を大幅に短縮することができるだろう。気力を新たに「夢」に向かって、強くボールを蹴りだす「場」、私の軸足を支える足裏の小さな地面、しかししっかりと動かぬ大地が、私には必要なのかもしれない。

世界遺産専攻（博士課程前期）、世界文化

遺産学専攻（博士課程後期）を運営し、院生の教育を進める過程で、私は、世界「遺産」が単に保存・修復の対象に留まるのではなく、それを「道具」ないし手段として人類のために使う必要性と必然性を意識するようになった。これは、同僚の斎藤英俊教授の影響によるところが大きい。世界遺産を共有することで、人類が生きる舞台としての文化と自然の大切さを知り、紛争の抑止と平和構築への貢献が可能になるという方法的な思想である。建築や遺跡に限らず、景観や自然を含む地球の資産を保護し、尊重し、共有するためには、情報と人が集まり、平和構築を目指すための分析と議論を進める「場」が必要である。各国の外交的思惑が入り乱れる国際機構ではなく、若き頭脳と平和への意志を抱える大学こそがそうした「場」に相応しいであろう。

世界に向けてきらりと光るその「場＝フォーラム」は小さくていい。ただ、その「場」は人類を育む文化と自然に対して開かれ、地球全体を包む平和への望みを入れるだけの知的な広さを備えていなければならない。強いて名づけるとすれば、「世界遺産研究情報センター」とでも言えるだろうか。世界で一つの小さな「知のフォーラム」の生成は、しかし、微力な私にとって、きわめて大きな「仕事」になるであろう。そして、大きな舞台を求めるであろう。それは、大

学の枠を超えるかもしれない。あるいは、それは、小粒の成果主義や目先の資金導入に翻弄される現在の「下を向いた」大学を当然超えるべきかもしれない。この「場」の生成に取り組むとすれば、「ローマの夢」の実現は、さらに遠のくのであろうか？いや、そうではない。大学を超える「知のフォーラム」の生成を私は、ここで初めて「夢のプロジェクト」、私の最後にして最大のプロジェクトと呼ぼう。この「プロジェクト」は、これまで抱き続けてきた「夢」を実現する「場」にしなくてはならない。私は、50代最後の一年を刻んでいる現在の自分も忘れて、いや、そうした時の流れに立つからこそ、ここでさらに大きな「夢」を見はじめようとしているのであろうか？



来年度調査を予定しているブトレマイスの教会堂遺構（リビア東部、6世紀）